

〔研究報告〕

福祉施設利用者への音楽ボランティア導入の実際と今後の課題 —「音楽ボランティア協会・赤とんぼ」の活動から—

相澤 保正¹⁾

要 旨

「音楽ボランティア協会・赤とんぼ」(以下「赤とんぼ」とする)は、筆者が同志に呼びかけて平成14(2002)年8月に誕生した。爾来今日まで、各種福祉施設を訪問し、その利用者のQOL向上を目的として、利用者参加型の音楽療法的活動を行ってきた。

「赤とんぼ」が11年間で訪問した福祉施設は、延べ116ヶ所(平成25年10月現在)で、そこでは会員の手作り歌集を配布して、会員と利用者が一緒に歌を歌ってきたが、配布した歌集は約8300冊に上る。

現在、わが国は超高齢社会に突入し、5人に1人が高齢者ということで、これまで経験したことのない社会状況であり、国民が安心、安全に暮らしていくには、自治体や一人一人の生き方に、難しい各種の対応が迫られている。

高齢社会では必然的に、特別養護老人ホームや介護老人保健施設に入所して、そこが終の棲家となる高齢者も数多く存在することになる。この各種福祉施設で暮らす高齢者の身体的ケアは専門職が受け持っているが、人間としての精神的な豊かさを感じながら暮らすことについては、果たしてどうだろう。この人間の心の豊かさが湧きあがってきて、心が癒されるには、臨場感あふれる音楽の生演奏(ある程度の演奏水準を持つ)がとても有効である。筆者はこの心の癒しとなる音楽を、生命の讃歌と認識し、会員とともに利用者(入所者)参加型のボランティア活動を継続してきた。

筆者は、「赤とんぼ」のような音楽療法的活動を展開する団体が数多く誕生することを望んでいる。またこのような活動は、力量豊かな音楽療法士が担うことも出来るので、音楽療法士個人での活躍にも期待したい。

現在わが国では、音楽療法士は国家資格でない為、職業としてなかなか成り立たないことが、活躍のフィールドを広げ難しくしている要因でもある。この解決策の一つとして、自治体や施設のユニオンが音楽療法士を雇用して、その音楽療法士が各福祉施設を巡回して音楽療法を行う、という発想はどうか。丁度、訪問看護や訪問介護と同様の発想であり、筆者はこれを積極的に提言したい。

キーワード：音楽ボランティア、福祉施設利用者、心の癒し、赤とんぼ、音楽療法

1) 弘前医療福祉大学短期大学部 (〒036-8102 青森県弘前市小比内3-18-1)

I. 緒言

WHO（世界保健機構）の発表による世界保健統計2012年版によれば、日本人の平均寿命は男性が80歳、女性が86歳、男女平均が83歳であり、わが国は世界一の長寿国である。最下位の193番目の国の平均寿命は47歳であるから、日本人の長寿は大変よろこばしいことである。しかしこの長寿社会は、わが国がこれまで経験したことのない社会現象であり、昭和58（1983）年頃から昭和文化的の爛熟期ともいえる時代に入ったこととも相まって、ハード面でもソフト面でも喫緊の備えが必要となってきた。国や地方自治体は各種福祉施設の増設やマンパワーの養成に取り組んできたが、高齢化率のはやさに各種対応が追いついていけないのが現状である。

平成21年度の厚生労働省の全国調査によれば、ただちに特別養護老人ホームに入所が必要だが、入所できない人が4万人いるという。また入所希望者の数のみを示すと42.1万人いるという。

このような状況であるから、高齢者の福祉施設はいずれも定員いっぱいに入所者を抱え、精一杯のケアを行っていると思像できるが、身体的な介護は手がまわっても、メンタル面は果たしてどうだろう。各施設でも心砕いていることと想像するが、入所者が精神的な幸福感に満たされるときは、一体どのような場面であり、どのような要因によるのだろうか。

筆者は高齢者を福祉施設で暮らし、そこが終の棲家にもなるという方々の心の癒しを目的として、音楽の生演奏を提供し、入所者と会員が一緒になつかしい歌を歌う、入所者（利用者）参加型の音楽療法的活動を展開したいと考えた。

このことを核として同志に呼びかけ、平成14（2002）年8月「音楽ボランティア協会・赤とんぼ」（以下「赤とんぼ」とする）を立ち上げた。爾来今日までの11年間、各種福祉施設への音楽ボランティア導入の活動を継続してきた。

次項から、この「赤とんぼ」の活動内容や今後の展望等について述べていく。

II. 「音楽ボランティア協会・赤とんぼ」の実際活動と特色

1. 会員の構成と活動の目的

(1) 会員の構成

「赤とんぼ」の会則で、「会員は本会の趣旨に賛同する高校生以上で組織する」と簡潔に定めており、難しい入会条件は設定していない。平成14（2002）年8月創立時の会員は20名でスタートし、現在（平成25年10月）58名の会員が所属している。

会員の年齢層は60歳以上が約8割を占め、約2割が壮年と学生達の層である。

ひとつの職業を全うし、また子育てから解放され、時間的に少しゆとりが生じた方々が、自己を見つめ直し周辺の社会環境を見渡して、何か社会に貢献出来ることはないかと思案したとき、ボランティアに行きついた、という方々が高齢者層の会員である。この層の方々の社会経験は豊かで、教師、銀行員、会社員、看護師、旧国鉄、音楽家、民生委員、保護司、警察友の会など、多岐にわたる職業や社会奉仕に携わった経験者が多い。

この為、現代の超高齢社会のオアシスともなる「赤とんぼ」の活動の意義についての認識は高く、会は大変円滑に運営されている。働き盛りの年齢層の参加は少ないが、時間的な制約もあり止むを得ないことと判断している。学生達も参加するが在学期間が過ぎると、就職した都市へと散っていくので、会員としての在籍が短期間となることも止むを得ない。この学生達の小さな種が新天地で芽を出すことを願っている。また、すべての会員は音楽の愛好者であり、腹式呼吸で歌を歌うことが介護予防につながり、誤嚥性の肺炎防止に有効であることを理解して活動している。

(2) 活動の目的

現在、施設に入所している高齢者たちの一日の暮らしは、朝の目覚めから就寝まで、ほぼ各施設が計画したスケジュールに沿って営まれている。高齢者たちが自らの意志で新しいことにチャレンジしたり、若い頃から趣味としてきたことを継続出来る環境を得ることは極めて稀であろう。この現況において、福祉施設に各種ボランティアが訪問することにより、高齢者たちのQOLが向上することは容易に推測できる。

人はだれでもそれぞれの長い人生において、好きな音楽や思い出深い歌を胸の奥深くに持っているものである。「赤とんぼ」は、それらの音楽を文部省唱歌や童謡、なつメロのジャンルで推測し、高齢者たちと会員と一緒に歌い、入所者参加型の活動を基軸に置いている。次の一文は筆者が雑誌¹⁾の巻頭に寄せたものである。

「過日、ある新聞の読者欄が目にとまりました。投稿者は67歳の女性の方でしたが、夫の入院が半年以上にもなって、一人で付き添っていたその方も倒れる寸前だったとのこと。深夜まで眠れない眠れないと苦しむ夫に、疲れ果てて何も出来なくなってしまったその方は、ふと「雪の降る街を」から始まって、唱歌や子守唄を意識がもうろうとした状態のまま歌い続けたそうです。すると、あれほど苦しんでいた夫が、いつの間にかやすらかな寝息をたて始めたというのです。

私はこの文を読んで、音楽の持つ『癒し』の力を改め

て認識しました。‘兎追いしかの山’‘夕焼け小焼けで日が暮れて’‘夏が来れば思い出す’と、多分何曲も歌い続けたことでしょう。それらの歌は病院のどんな薬よりも、ご主人に安らぎを与え眠りへと誘った良薬だったようです。そして、それらの歌はCDを聴くのではなく、長年つれ添った妻が歌う歌だったから良薬になったのだと思います。

こんな日々を送ったご主人は桜の花の散る頃、静かに息をひきとったとのことでした。—略—

音楽はこの事例のように、人間の精神に作用し、医学的治療でも解決しない苦痛などを和らげ、癒すことにも有用と考える。

「赤とんぼ」はこのように人間の精神に良好に作用し、副作用がなく、免疫力を高める「音楽」を核として、施設入所者（利用者）たちのQOL向上を目的として活動している。

2. 活動の内容

(1) 4つのセクションで構成

「赤とんぼ」は通常、次の4つのセクションを設定し一時間以内で活動している。

①歌唱（20分）

主に文部省唱歌、童謡など5曲くらいを全員で歌い、インタビューによる高齢者の回想などをはさみながら、生伴奏を伴った歌の中で心地よい雰囲気づくりと臨場感を醸成する。

②楽器の演奏（10分）

アコーディオン、ギター、マンドリン、ウクレレなどを演奏できる会員が、その日の活動に参加出来る場合、2曲ほど披露し、その生演奏を楽しむ。

③音楽に合わせて軽運動（10分）

会員のリードによって、生演奏に合わせて軽く身体を動かす。

④歌唱（20分）

主になつメロを5曲くらい歌い、曲間で高齢者たちと会員が会話し、高齢者たちの回想を導き出す。



「赤とんぼ」の活動開始時の風景

(2) 回想法、学習療法を融合した音楽療法的活動

「赤とんぼ」の活動のなかで、曲間に自然な雰囲気の中で、高齢者が自己の人生を回想して、思い出を語ってもらうシーンを現出させている。高齢者の語りは、‘戦地から引き揚げて来たときのこと’‘リンゴ畑の経営と収穫のこと’‘小学校の教師や保育所の保母時代のこと’‘自分の子どものこと’‘ふるさとのこと’等々沢山の思い出の回想がある。

回想法は過去の思い出を現在と未来に活かすことが目的だが、高齢者たちが日々過去を回想し、そのことを語り合う多くの機会を設けると、認知症の進行もある程度防止できると、筆者は考えている。

「赤とんぼ」は月に1回福祉施設を訪問して活動するが、津軽一円の施設を代る代る訪問するので（施設側から訪問要請がくる）、一ヶ所に集中して継続的に実践するとどうなるかのデータは持ち合わせていない。しかし筆者は、このことを試みる価値があると認識している。

「赤とんぼ」は会員の手づくりによる‘歌集’を毎回持参し、入所者にプレゼントし、その日準備した歌と一緒に歌う。また、この歌集の歌詞を入所者に声を出して読んでもらうシーンを挿入している。平常、入所者が声を出して文字を読む機会は少ないようなので、このことは学習療法的活動ともなる。

声を出して歌うこと、アコーディオンなどの生演奏を聴くこと、音楽に合わせて軽く身体を動かすこと等は音楽療法であり、これに回想法、学習療法を融合させた音楽療法的活動が、「赤とんぼ」の特色である。

(3) 選曲

現代社会を反映し、「赤とんぼ」は高齢者の福祉施設を訪問する機会が多いが、その他デイサービス施設、身体障害者施設、知的障害児施設、知的障害者施設なども訪問してきた。それぞれの入所者や通所者の年齢層や障害の程度、また季節や歳事等にも配慮して、その日使用する音楽を決定する。選曲はその日の訪問活動の成否を、ある程度決定づける重要なファクターでもある。

「赤とんぼ」は多数を対象とする音楽療法的活動なので、即興演奏は適切でない為、既設の音楽を使用する。そして訪問対象利用者（入所者）の平均年齢をひとつの目安とし、その日の選曲をする。1回の活動では10曲程度選曲し、会員の手づくり歌集を持参する。歌集の部数は入所者数プラス職員数とし、これまで延べ116ヶ所（平成25年10月現在）訪問し、約8300冊プレゼントしてきた。このことを言い換えると、8300人の人々と歌を歌ってきたことになる。

これまで歌ってきた曲名は次の通りである。

◆文部省唱歌、童謡など

おぼろ月夜、鯉のぼり、花のまわりで、春の小川、
うれしいひな祭り、どこかで春が、春よ来い、みか
んの花咲く丘、めだかの学校、うみ、茶摘、浜辺の
歌、牧場の朝、ふじの山、故郷、われは海の子、雨
ふり、蛙の笛、たなばたさま、しゃぼん玉、赤とん
ぼ、荒城の月、紅葉、村祭、旅愁、ローライ、里
の秋、月の沙漠、とんぼのめがね、夕焼小焼、一月
一日、スキー、灯台守、冬景色、お正月、お山の杉
の子、かなりや、幸せなら手を叩こう、鐘の鳴る丘、
七つの子、ゆりかごの歌他

◆なつかしのメロディー、愛唱歌など

青い山脈、あざみの歌、上を向いて歩こう、銀色の
道、高校三年生、高原列車は行く、三百六十五歩の
マーチ、見上げてごらん夜の星を、森の水車、リン
ゴの唄、山小舎の灯、喜びも悲しみも幾歳月、赤鼻
のトナカイ、明日があるさ、大きな古時計、かあさ
んの歌、切手のないおくりもの、きよしこの夜、四
季の歌、知床旅情、世界に一つだけの花、翼をくだ
さい、夏の思い出、椰子の実、雪の降る街を他

これらを適切に組み合わせ、その日に歌う曲目を決定
してきた。入所者は歌う曲目のほかに、楽器の演奏や軽
運動で流れる生演奏も、自然に楽しむことができる。

3. 利用者（入所者）の反応

「赤とんぼ」の活動中や終了後の入所者たちの反応や
変化など特徴的な事項について述べてみる。

- (1) 活動開始前と終了後では、柔和な表情に変化する
人が多い。
- (2) 平常の入所時には見られない言動が現れる（職員の談話）
- (3) 約1年前に歌った「歌集」も持っている。
- (4) 活動の余韻もあって、翌日も施設内で「歌集」を
持ち歩いている。
- (5) 全員で1曲歌い終えた後、よく口を開けていた入
所者に独唱を依頼すると喜んで歌う（このときは
マイクを使用）。
- (6) 「リンゴの唄」を歌い終えた後、「自分がシベリア
から青森港に着いたとき、この歌が流れていて、
故郷に帰った実感が湧いた」という回想があった。
- (7) 「赤とんぼ」の訪問後に、その感想を新聞に投稿
した82歳の元教師（男性）があった。
- (8) インタビューで言葉が出ず、手を横にふって、自
分は話せないと訴えた男性（70歳代後半）がい

た。童謡「ゆりかご」を全員で歌った後、その男
性に「ゆりかご」を歌ってほしいと誘導したとこ
ろ、はっきりとした歌詞とメロディーで上手に歌
う場面が出現した。このとき会場にどよめきが起
こった。筆者は、言語聴覚士の治療を受けると言
葉を取り戻す可能性があると感じた。

- (9) 童謡「どこかで春が」を歌い終え、歌詞に出てく
る‘こち吹いて’とはどういう意味かと問いかけ
たところ、挙手して正答した後、‘こち吹かば匂
いおこせよ 梅の花’と拾遺和歌集の一句を紹介
した利用者があった。このときも、会場から感嘆
の声があがった。

これらの事例のように利用者（入所者）からは、さま
ざまな好ましい反応がある。

「赤とんぼ」は平成24（2012）年に創立10周年を迎え
たので、その歩みを記念誌にまとめた。この記念誌の企
画のひとつとして、各施設や病院の中核として勤務して
いる職員と、「赤とんぼ」の幹事らとで座談会を開い
た。この座談会のなかで幹事の本間²⁾氏が語ったこと
の一部を紹介する。

「本間です。資料によれば延べ113回施設を訪問した
ということですね。赤とんぼは相澤先生ご夫妻を中心
にして、ボランティアグループとして、弘前市周辺、津軽
地域の一部の福祉施設を訪問してきました。もう10年
経ったかな、私はそう思いました。音楽を通して、入所
している方々の心の癒しに、いくらかでも貢献してい
るのではないかなと、そう思います。

私たちが施設を訪問して帰るときの気持ちですがね、
今日は施設を訪問して、歌を歌ってよかったなあという
気持ちで、清々しい気持ちで帰ります。これは童謡だと
か、小さい頃に歌った唱歌をですね、それぞれみんな心
の中に思いを秘めて、思い出しているのでしょうか。入
所している方の表情が、私たちが最初にお会いする時
と、帰る時とでは全然違いますね。和らいでいるとい
うか、さっぱりしたような表情ですね」

この会員は創立時から今日まで活動を継続し、いくつ
もの施設訪問を経験してきた人で、感想は全会員を代表
するような内容である。



音楽によって軽い運動、風船バレーの風景

4. 施設の介護職員、作業療法士らの所見

施設の管理者や介護職員及び病院に勤務する作業療法士らから聞き取った、「赤とんぼ」の活動に対する感想や所見をまとめてみる。

- (1) 音楽に合わせて身体を動かすことが、リハビリの点でもよいことだ。
- (2) 懐かしい歌が多く、進行役の話題の投げかけも利用者の年代に合っていた。
- (3) 意識の高いボランティアグループという印象で、初めての体験だ。
- (4) 自分（施設長）が、最初から最後まで入所者と一緒にいたのは、今回が初めてだ。
- (5) カラオケボランティアと雰囲気が違う。入所者も楽しかったと思う。

ここで再び、「赤とんぼ」創立10周年記念誌の座談会で語られた作業療法士や介護職員の言葉を紹介する。

最初は病院に勤務する作業療法士の高橋³⁾さんが語ったことである。

「当院では、ボランティアの方が慰問に来るということはないので『赤とんぼ』さんと出会えたことは、本当に奇跡のような感じで、感謝の気持ちで一杯です。『赤とんぼ』さんには、年に1回、病院の方に来ていただいておりますが、平成17年からのお付き合いで、もう何回もきていただいていることになります。長期入院の患者様も多いので、そういった患者様にとっては、顔なじみのような感じで『赤とんぼ』さんが今年もいっらしゃるとお知らせすると、失礼なんですけど『ああ、あの人がべ?』とにっこりして、相澤先生のことをおっしゃってて、本当に友達でも来るかのような、良い表情をされる方が、大勢いらっしゃいます。当院でも、お互いにいい気持ちで歌おうということから、『赤とんぼ』さんが来る日に間に合うように、季節に合った飾りを作っているのですが、患者様みなさん、一生懸命作ってくれています。『赤とんぼ』さんと一緒に、これをバックに歌うんだってということで。前回までクイズで正解すると『赤とんぼバッジ』をいただいていたので、もらった患者様は次の『赤とんぼ』さんが来院された時に、そのバッジをみなさんつけて参加しています。誰も強制したり、そういえばバッジあるよね?って話はしてないんですけど、自発的につけてきてくれて、それで一度、相澤先生に『あれ?赤とんぼのバッジをつけてくれてるんですね』と指摘された患者様は、とっても喜んで、その後も、何度も『気づいてくれたんだよ』って喜んでいました。ある入院患者様は、退院する時に『私も、赤とんぼさんに入りたいんだけど、どうすればいいの?』って尋ねてこられて『私もああやって歌でボランティアしたい』って目を輝かせておっしゃっていました。—略—

精神を病んでいる方々にとって、音楽療法は有効であり、精神科の医師で音楽療法を熱心に推奨し、実際に行っている人も存在する。この病院の作業療法士のように患者に寄り添って回復を願い、熱心に音楽療法的リハビリを行っている専門家もいる。患者がとても喜んで音楽療法を受け入れる様子の一端が、この談話から窺える。

次に福祉施設の介護専門職の松田⁴⁾さんの談話を紹介する。

「私どもは平成17年から『赤とんぼ』さんとお付き合いさせていただいております。『赤とんぼ』さんから連絡をいただくと、ピアノの調律をしなければいけない時期だということで、1年に1回、おいでになる前に調律をしています。『赤とんぼ』さんがおいでになる時には、必ず歌集をお持ちいただいております。最初の年は、特養の利用者さんだけ集まってもらいまして、スタートしたのですが、デイサービスの利用者さんも参加できないかな?ということで、次の年からデイサービスの利用者さんも、一緒に楽しんでもらっていました。利用者さんだけではなく、私自身も、いつもすごく楽しくて。時代々々によって歌は違ってくると思うのですが、耳馴染みのものといったら童謡、唱歌になると、若い方でも口ずさめるということで、サンアップルホームさんでもおっしゃるように、車いすのポケットに、歌集をいつも入れていたり、床頭台の引き出しの中に入れておいて、ベッドに横になっている時に歌集を見ているという方もいます。—中略—この間来ていただいた時に、一番前に座りたいっていう車いすの利用者さんがいたんですけども「椅子なんだけど大丈夫?」って声をかけたところ「大丈夫」とのことで、椅子の方に座ってもらいました。いつもだと、車いすに座っていると、体が後ろの方によりかかった状態なんですけど、肘掛にしっかりつかまって1時間、右手の方には歌集を持って楽しんでいました。椅子に座って歌を楽しみ、リハビリも兼ねてたなということで、スタッフの方も驚きました。表情の変化だけでなく、リハビリまでさせてくれる『赤とんぼ』さんに、今後ともお願いしたいと思っています。」

この談話から、利用者が音楽することをとても楽しみ、翌日から歌集をながめて余韻に浸っている様子や、平常車いす生活の方が一番前の堅い長椅子席を希望するなど、普段と異なる様子が出現する。

三人目に福祉施設の介護、生活相談などの専門職の東谷⁵⁾氏の談話を紹介する。

「『赤とんぼ』さんと私、個人との繋がりを考えてみた時に、私は平成16年からサンアップルホームで働きはじめました。働き始めて1年目、2年目で『赤とんぼ』さんがいらしていただいていることを知り、恥ずかしながら、その、働き始める前から、サンアップルホームの

方においでいただいていたということで、私よりも施設、そして、利用者の方との付き合いは長いんだと、改めて感じたところです。座談会の中で、いろいろと話にはなるんでしょうけど、これだけ長く施設の方にきていただける団体さんというのは、ほとんどないです。一見さんではないんですけど、一度来て終り、という団体さんが非常に多い中で、赤とんぼさんのように続けて来ていただけるということで、利用者の方自身も、口にはしなくても覚えているんです。というのは、本人のベッド横のタンスの中に、1年前、2年前の歌集が入っていたりとか、車いすの横にしまっているとか、時々見る方もいます。それで私、今話した部分ともう一つ『赤とんぼ』さんで他と違うというか、すごいなと思うところは、一方的に歌を歌う団体さんが、結構多いんですけど、そういう方々がいらっしゃった時に、利用者の方が、どういう表情をしているかという、自分が参加しているっていう意識を持っていない。ただ聞いている、コンサートに行き、ただ聞くだけなので、楽しんでるっていう風には言えないな。ですけど『赤とんぼ』さんがいらっしゃった時は、正直、私達施設の職員が知らないような表情とか、この人は歌を歌えないんじゃないか、というような方であっても歌を歌い始めたりとかしますので、是非これからもよろしくお願いします。」

これらの専門職の方々の談話にもあるように、音楽が利用者の精神に作用して、平常では見られないような、好ましい表出があったり、普段歌を歌わない利用者が、一体感のある音楽的雰囲気の中で、自然に歌い出す現象が出現する。これらのことが、「赤とんぼ」の活動目的とするところでもある。

Ⅲ. まとめと将来への提言

ある年の秋の日曜日、「赤とんぼ」が訪問した特養の1時間の活動を終了した帰り際に、車いすの入所者のそばで、50歳くらいの女性の方が泣いていた。会員が「どうなさいましたか」と問いかけたところ、「私は、今日1年ぶりで母の声を聞きました。うれしくて、うれしくて涙が止まりません。母はもう娘の私の顔が分からないのです。私からどんな風に声掛けしても、一言も声を出してくれません。それが今日、ふるさとや紅葉を皆さんと一緒に声を出して歌いました。本当に驚きました。そ

して本当にうれしいです……」。この事例やここまで述べてきたことから、音楽が人間の精神に作用して、医学的な治療の及ばないある領域をカバーできることは明白である。超高齢社会に突入している我が国は、副作用のない音楽療法をもっと活用する方向に進むべきである。

音楽療法士も育成されているが、民間認定であり診療報酬の関係も相まって、専門職としては確立していない。

国家資格となるまでは、音楽療法の分野はボランティア的な活動が主流となろう。故に筆者は、「赤とんぼ」のようなグループがいくつも誕生し、弱い立場の人々のメンタル面をケアする活動を展開して欲しい、と願っている。音楽療法士を1施設で雇用することは、種々の面から難しいと思うので、市町村の自治体や施設のユニオンで音楽療法士を雇用し、この専門職が施設等を巡回して音楽療法を行う、という方法はどうか。少々条件は異なるが、大きな捉え方として訪問看護や訪問介護と同様の考え方である。コンクリートから人へとか、社会の基盤は人間の尊厳にある、などという言葉だけが空虚に踊っているのではなく、ゆりかごから墓場まで、真に人を大切にする国家こそ本当の先進国であり、我が国がこのベクトルを持ち続けることを心底から願っている。

(受理日 平成25年10月24日)

引用文献

- 1) 相澤保証：音楽と癒し、月刊「弘前」、第268号、p.1, 2001
- 2) 音楽ボランティア協会・赤とんぼ 創立10周年記念誌「10年間の歩み」p.44
- 3) 同上記念誌、p.46
- 4) 同上記念誌、p.49
- 5) 同上記念誌、p.45

参考文献

- 1) 社保審一介護給付費分科会第90回(H24.5.17)
 1. 平成23年度老人保健健康増進等事業 特別養護老人ホームにおける待機者の実態に関する調査研究事業～待機者のニーズと入所決定のあり方等に関する研究～